番外編

根深　誠（ねぶか　まこと）

「めくら、蛇におじず」とは、言ったものである。編者は「ルポライターをルポ」の暴挙をやった。勝手な考証もやってみた。

ただ、素人なりの良心があって、拙文であろうと、たかがＯＢ会会報であろうと、ご迷惑をかけては…と、校閲をお願いした。それも「蛇におじず」に当たることではあるけれど。

ネパール出立前の多忙に関わらず、彼からお返事をいただいた。ほんの数ヶ所しか赤ペンはなく、それは「時代の寵児→？」の箇所以外は訂正した。校閲済みの本文である。

あれから注文した本も入手できて、確認した結果、「遥かなるチベット」には、はっきり「明治大山岳部」と出ていた…もう、赤面。

著者略歴をこれだけ見比べてみたことはない。その結果、当然のことであるけれど「ルポライター　根深誠」が確立するにつれ、前歴が省略されていく過程を知った。それは著書が増えたら、字数がはみ出して…の単純な理由でもない、はからずもかいま見た一人の岳人の自己実現の道程でもあった。

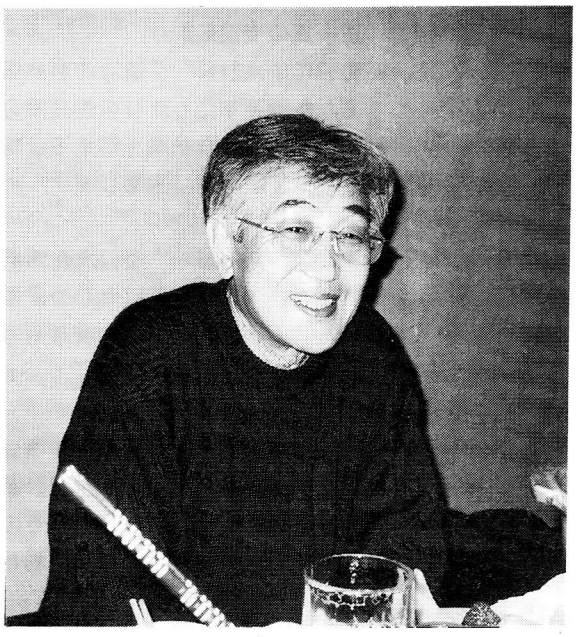
今回の未熟は許していただこう（とりあえず、了解済み）。

未熟といっても、「植村　直己」が、彼の心にある…この直感は正しい。根深氏が、辺境の旅にある時、またマスコミにさらされる時、それが孤独で、辛ければ辛いほど、浮かび上がってくる男…。

それは、私が「人対人」の言葉の中から、思考の間合いから、たかが半日の出会いであろうと…。直接お会いすることで、キャッチし得た「真実」である。そしてそれが「ルポの真髄」であると思った。

なお、本文に氏の白神山地での活動の情報は抜けている。曲解を避けるべく、インターネット上の公開情報（金沢クンブ協会玄田幹夫氏提供）を先に掲載しておく。

よって、続く本文は「お笑い」で、お読み下さい。



《東奥日報・20世紀の群像》
1999年11月20日掲載＜８２＞
根深　誠（ねぶか　まこと）
～白神山地のブナ林守る～

略歴1947（昭和22）年～。弘前市生まれ。
登山家。弘高、明治大学農学部卒業。
ヒマルチュリ東尾根（ネパール、77）、エベレスト西稜（同、81年）などの登山隊に参加。86年ゴッラゾム（パキスタン）初登頂、88年シャハーンドク（同）では隊長として初登頂に成功した。84年に「白神山地の自然を守る会」と「青秋林道に反　　対する連絡協議会」を設立、ブナ原生林保護運動に取り組む。
95年、河口慧海のチベット潜入ルートを解明した「遥かなるチベット」（山と渓谷社）でＪＴＢ紀行文学大賞を受賞。

●世界遺産への道開く

1987（昭和62）年、青秋林道（広域基幹林道「青秋線」）の建設問題は緊迫した局面を迎えていた。82年から始まった林道工事は、秋田県側が既に県境に迫り、本県側に入り込んで建設を進めるため、赤石川源流部の水源かん養保安林の解除を申請した。認められると工事は白神山地のブナ原生林に突入する。

●青秋林道に異議

追い詰められた根深誠ら「青秋林道に反対する連絡協議会」は保安林解除に反対する異議意見書の提出を目指し、10月19日夜、赤石川流域では最奥の集落・鰺ケ沢町一ツ森地区で「赤石川を考える会」を開く。ブナ林の保護を訴える根深らに対し、住民は伐採による山の保水能力

低下、川の汚濁や水量減少、木材の県外流出など林道建設の影響を次々に指摘。出席した50人のほとんどが反対署名に応ずるという予想外の展開になった。ブナ伐採による山の変化を住民は敏感に予測していたのだった。

ブナ原生林を守るという自然保護運動が赤石川流域の住民運動と一体となり、青林道が中止に向け大きく動き出した瞬間だった。連絡協議会のメンバーは半信半疑だったが、根深だけは反対運動の勝利を確信し、気持ちの高ぶりを抑えられないまま家路に就く。

その夜の出来事を根深は「最終キャンプから山頂を目指したアタック隊が悪天候に遮られて遭難寸前、一瞬、雲が途切れたら頂上が目の前にあった」とヒマラヤの高所登山に例え、「登山家として初登頂は最高の栄誉だが、一ツ森の集会は初登頂と並んで人生最大の喜びだった」と表現する。

集会はその後も続き、異議意見書は最終的に14000通に達した。結局、これが北村正哉知事の柔軟発言を引き出し、県議会をも巻き込んで世論は急速に林道建設中止へと傾いていく。

白神山地のブナ原生林は守られた。90年、林野庁は 17000㌶を森林生態系保護地域に設定、92年、環境庁が自然環境保全地域に、93年、白神山地は屋久島とともに日本の世界遺産登録第一号になった。

根深が山に熱中し始めたのは弘高時代。岩木山には３年間で百回以上登った。高校二年の時、秋田県立大館鳳鳴高校の五人が冬の岩木山で遭難、四人が凍死した。たまたま登山中の根深らが事件を通報したものの、同じ高校生が、通い慣れた岩木山で遭難死するという衝撃が、逆に根深を山に駆り立てる。

山岳部の名門明治大学に進学。学生時代は岩登りや冬季縦走など合宿に明け暮れた。

念願のヒマラヤ遠征も果たし帰郷した根深は、イワナを釣りながら沢や山を登る“山釣り”の魅力に目覚める。沢登りは日本の伝統的な登山スタイルだが、釣りと沢登りを組み合わせた登山は当時珍しく、最も適したフィールドとして目に留まったのが、沢が複雑に絡み合う白神山地だった。

白神山地と本格的にかかわる中で、根深はマタギの存在を知る。高堰辰五郎（岩崎村大間越）大谷石之丞（鰺ケ沢町一ツ森）鈴木忠勝（西目屋村砂子瀬）工藤成元（同）。中でも工藤とは山を一緒に歩き、「砂子瀬マタギ」最後のシカリ（統率者）鈴木からは白神の沢一つ一つに付けられた名前のほか、マタギの儀式や山の伝説、イワナ捕り、杣（そま）道などの知識を吸収する。鈴木から得た知識を確かめるため山に入り、また新たな疑問をぶつける、という日々が続いた。

白神山地の中核部には、登山に使う道はない。沢を道代わりに進み、尾根をたどって、やぶをこぐ。根深は、沢が複雑に入り込んだブナの密林を地図やコンパスにほとんど頼ることなく、縦横無尽に歩き回る。こうした知識は、学生時代から培った登山技術を下敷きにマタギとの親交の中で身に付けたものだが、根深と山を歩いた登山者は、白神山地を知り尽くした才能に、だれもが驚く。

●入山規制を批判

白神山地で新たな難題が持ち上がっている。核心部の入山問題で、根深は一貫して「規制反対」の立場をとる。根深は「ブナ原生林では古くからマタギが猟を行い、地元の人もキノコや山菜採りで入山し、登山者も受け入れてきた。入山を規制したから原生林が残ったわけではなく、まして、だれもが簡単に入れる山ではない。人が自然と親しんでこそ世界遺産」として、世界遺産を理由に地元民や登山者を規制する在り方を批判する。

青秋林道が正式に中止に追い込まれた90年は、南アルプスや白山など「スーパー林道」事業が、自然保護団体の激しい反対を押し切って完了した年に当たる。その後、90年代後半になって、ようやく各地で「大規模林道事業」や「奥地等産業開発道路」（奥産道）など林道建設を中止する動きが相次ぐ。スーパー林道よりさらに大掛かりな大規模林道の見直しには「時のアセス」も適用された。

青秋林道の建設中止は、大規模な自然破壊をもたらす「峰越し」林道を拒否した先駆けとして、わが国の自然保護運動史上に燦然（さんぜん）と輝く。　（工藤弘之）

文中敬称略

【社会全般 7 】

白神山地を縦断する青秋林道に、まず秋田県の自然保護団体が1982（昭和57）年５月に反対の声を上げ、本県の保護団体は同年７月から行政当局に林道再考の働き掛けを始めた。本県の反対運動の母体になったのは青秋林道に反対する連絡協議会で、初代会長には県自然保護の会会長で弘大教授の奈良典明（ならのりあき）（1931～・弘前市）がなった。二代会長は三上希

次（みかみまれつぐ）（1945～・弘前市）、三代会長は村田孝嗣（むらたたかつぐ）（1949～・尾上町）と続くが、いずれの代のときも運動の中心に根深誠がいた。

87年になって鰺ケ沢町赤石川の流域住民が「林道開発で川が汚染されるのでは」と立ち上がり、赤石川を守る会を発足させた。会長には、赤石川の漁業監視員を25年年間務めてきた石岡喜作（いしおかきさく）（1923～・鰺ケ沢町）が就任した。

保護団体と地元関係住民が手を組むという新しい運動体制がつくられ、林道建設に伴う水源かん養保安林の解除に対し、わが国林政史上空前の数の異議意見書を集めた。

もともと木材の流通に関心があった知事の北村正哉（きたむらまさや）（1916～・三沢市）は意見書の数を重視し87年、林道建設に疑義を投げかけた。

この発言を契機に流れが白神保護に傾き、当時与党の自民党県連政調会長・金入明義（かねいりあきよし）（1944～・八戸市）が実質的に保護側に軍配を上げ、青秋林道問題に終止符を打った。

根深　誠氏（ねぶか　まこと）

1947年弘前市に生まれる。1973年以来、ヒマラヤの旅と登山を続ける一方、国内では白神山地のブナ原生林保護に挺身する。現在はフリーのルポライター。著書に、『みちのく渓流釣り』、『ブナ原生林白神山地をゆく』、『ブナ原生林白神遺遇』（立風書房）、『風の瞑想ヒマラヤ』（立風書房・中公分布）、『白神の四季』（白水社）、『山の人生』（ＮＨＫブックス）、『ヒマラヤを釣る』、『遥かなるチベット』（山と渓谷社・中公文庫）、『北の山旅釣り歩き』（無明舎出版・中公文庫）、『北の山里に生きる』（実業之日本社）などがある。

氏は、石川ネパール協会発足一周年記念行事のメインゲストとして招かれ、12月１日、「ヒマラヤを旅して」を講演された。

「山の語り部に聞く」のルポに、相応の行き詰まりを感じていた編者には、行間が判るともいうべき講演であり、また、そのお人柄に魅せられて、格違いも省みず、三次会まで、しっかりお供をしてしまった。

この出会いのために自分の企画も、また行き詰まりもあったのだ！会報の出来など二の次で「運命」に酔えた私。無謀登山は出来ないけれど、無謀ルポなら…。

「登山家」を肩書きとできる根深氏の、山との出会いは小６に遡る。戦後の食料難をまだ引きづる時代に、彼は奥山へ入り込めばあけびが取れるかもしれないと、秀麗な岩木山を目指した。ひたすらあけびを求めた末に千ｍを越し、おののきつつも、這松をはじめ見慣れぬ植生、変わりゆく景観に感動を覚えたという。この岩木山には、高校の３年までに百回は登り、四季を通して山の基礎を体得することになった。

その途中には、冬山で４人の高校生遭難に遭遇。通報したものの、それは保身を図る校長の「冬山は従来本校では禁止していた」の弁明から、処分対象とされた。結果、彼は県警から表彰をうけながら、停学処分の措置を受ける。

彼はそれ以来勉強が苦手になったと笑うが、上辺の辻褄合わせには迎合しない生き方を選ばせていく、節目となる事件であったようだ。

大学は、植村直己＝明治大学山岳部の連想となる明治大。そして当の山岳部に明け暮れた青春だった。その植村氏は、根深氏が３年生の時、世界放浪から帰ってくる。大学合宿に遊びに来た彼は深夜まで話相手を求め、彼らの翌日の行動にしばしば支障をもたらす事態になったという。

明治大のしごきは並ではなく、１３人入部した同期のうち、晴れてＯＢになれたのは彼一人であった。みんなからは、「さすがその頃から根性があったんですね」と言われるが、単に「辞める」が言い出せず、そのうち「辞める時」を失ってしまった結果だと茶化す。もちろんそれも理由の一つではあったろうが、「辞めなかった」根深誠氏がいたのである。

中央：駐日ネパール王国大使館　特命全権大使
　　ケダール・B・マテマ氏
左：ソバナ・バジュラチャリヤ
　　金大文化人類学講座修士
　　ネパール語講師
右：吉田淑子　学研指導者仲間兼山仲間
　　松本市のネパール写真展で大勝獲得
　　現在内田良平氏のおっかけを自認。
こういう方達の身近にいるとネパールは
「行けそうな国」の気になる。

その後の彼の記憶は何年度はどこそこと、きわめて鮮明である。それは充実していた日々の証であろう。卒業してすぐの1973年、明治大ヒマラヤ遠征隊の下見・交渉役として、ネパールに赴く。結果は、肝炎を患い、カトマンズで寝付くこととなり、病み上がりで1974年には帰国。翌年のチューレンヒマールは参加できなかったが、1976年ヒマルチュリ偵察、翌年には本番、1981年にはエベレスト西稜と、計７回のヒマラヤ登山が連なることになる。

それらで、彼は常に輸送係を担当することになる。年季をあてにされると同時に、彼自身ポーターと接するのが好きであった。彼らの時間観念、倫理感、交渉術など、体得したものは多く、ヒマラヤルポライターの素地が出来ていった時代でもある。

もちろん先の植村直己氏の存在は強烈であった。彼のマッキンリー遭難時には、夜召集の電話がかかり、個人装備だけで空港へ走ったら、すべての手続きがすんでいて驚いたという。そうやって突然冬期氷壁に挑むことになった彼は若手に工作させて、ジッヘルに回る立場であったが、寒さと難度に閉口し、その時、こんな所をたった一人で挑んだ男「植村直己」に圧倒されてしまったという。

それまでの彼は、およそ世間に属したことのない先輩植村氏には、攪乱された思い出の方が多かったようである。おそらく向田邦子が「字のないはがき」の中で「ふんどし一つで家じゅうを歩き回り、大酒を飲み、癇癪をおこして母や子供達に手をあげる父の姿」と書いた、そんな面の方を見ることが多かったようだ。

そのような鬱屈した先輩観が、「こんな所を、たった一人で！」で、砕け散る。頂上に日本国旗が翻っており、登頂を果たした後の遭難と確認したのも、彼ら捜索隊であった。

植村直己の生きざまに強烈なインパクトを浴びた根深氏は、「人がやった後をやるのは意味がない」の価値観にまず染まり、先鋭登山をめざすようになる。その志向は、1981年初めてのエベレスト隊も、おばさんも登れた東南稜など…と、西稜選択の檄となった。

その当時彼は、またも輸送係であったが、その任務で早めに現地入りすれば、高度順応にも有利となり、登頂隊に加われるかもの下心があったという。しかし運悪く選挙にぶつかり、ポーターが確保できず、１ケ月後到着の本隊の方が見切り出発をしてしまう。やっと全ての荷物を送り出し、個人装備をヤクにつけて出発したものの、ヤク遣いの女の子とさらにトラブルがあった。そうやってようようベースキャンプにたどり着いたら、西壁にとりついているヘルメットが見え、第一キャンプも設営済みになっていたそうだ。その遠征は、8750mでの敗退となる。

今も「おばさんも登れた」などにこだわらなければ頂上を踏めていただろうに…の、思いは蘇るらしい。

ただ、当事者ではない私は思う。頂上を踏めばそれで完結してしまう。なぜ、そのルートを選んだのか？どんな背景があったのか？不完全燃焼である方が、多くの逡巡に、秘められた物語があることに気付けるのではなかろうか。なぜ？どうして？が、ルポライターの必須資質であることを思うと、このエベレスト西稜隊の件も、やはり、彼の素地になっているように思えるのである。

ともあれ、彼の登山目的のヒマラヤ通いは、天安門事件の年1989年、東側の谷に入ったのが最後となる。その後は、登山隊解散後に楽しんでいた個人旅行の方が主体になり、ルポライターの地位を固めていく。

もちろん誰もが、体力的、時間的、経済的に無理となり、ヒマラヤからはいつか離れなけれ

ばならない。彼の場合は、「自己実現」の場がヒマラヤ山岳での「先鋭的」「バリエーションルートによる登攀」から、スムーズに「ヒマラヤ地域でのルポ活動」に移行できたのだといえよう。

愛するヒマラヤを巡る紀行なら、日本人の中でも、自分にしか「行けず」「聞けず」「書けず」の世界である。ヒマラヤが好きで、現地人にも溶け込める自分が、見て、聞いて、埋もれかかっていること、文字のない社会で、消えかけている事実を伝承を、自分こそが掘り起こせる人間である…そんな自己実現を彼は手にし、山から遠のいたのだった。

もちろん、5000mを越える峠越え、ロープを張っての激流横断など、「山から遠のいた」の表現はやや不適であるけれど、頂点を求める旅から、線へ面へ、記録をたどり、人の記憶をたどる旅に、心踊らせていった。

ルポライターの地位を揺るぎないものとしたのは、「遥かなるチベット～河口慧海の足跡を追って」の著書であり、ＪＴＢ紀行文学大賞を受賞する。この本は彼の先輩がおもしろいと、寸借していったもので、彼はノミネートされたことも知らず、最終選考の５冊に残ったところで報せを受けた。選考順位はその５番目であり、また、過去の受賞者の名前を聞けば壮々たる面々で、座興に紛れこんだとしか思えなかったそうである。結果は、５番の順位であったに関わらず、この大賞のねらいとする所に相応しいのどなたかの一声で決まったらしい。当時借金ダルマであった彼は、嬉しいより何より「いくらもらえるんですか？」と聞くのが先だったそうである。

「あれって、いつもは賞を権威づけるために有名作家が選ばれてて、ほんのたまに新人をとることがあるらしいんだけど…幸運だったねえ…。それに、賞を取るための運動とか、誰かの弟子であるとか、当然あるんだよね。俺、何にもなかったから…」

「時代と寝た女」という表現がある。特に秀でた歌唱力・美貌とも言えないのに、次々ヒットを飛ばし、時代現象にもなってしまった山口百恵…。電車の乗降口が、なぜかその人の前で停まった…。そのようなことが人生には起こってしまう。実力、努力、人脈、…どう並べてみてもそれを上回る人材がおり必然の理由が見つからない。多くの人がそのために泣き、転身も余儀なくされるであろうに、晴天の霹靂で手にする人もいる。…と書いてしまうと、恐れ多いのであるけれど、彼の関わった「ヒマラヤ・チベット」「白神山地」は、まさに時代と寝ると

石川ネパール協会の綺麗どころ。
左から３人目がネパール大使夫人。
左端：協会会長夫人　　左から４人目　筆者
１年前の事件が観光に影を落とすことのないよう、大使は積極的に活動している。今回も自ら参加を希望。ために協会事務局の仕事は倍増程度ではすまなくなったが…これが交流。

もいえるジャンルであり、はからずも根深氏は「自己実現」の選択が、食っていける以上に時代の波に乗り、名声の階段を登らせていくことになった。

時代の寵児、根深氏はかくして、羨望・誹謗を浴びる立場となり、受けた取材を故意に曲げて報道されてしまうことも多くなった。

「変な電話もかかってくるんだよ。『あんたの書いたのは嘘だ』って。『だいたいあんたはチベット語が話せるのか？』とかくるんだよ。『じゃあ、そこへ行ってみたことあるの？』と聞けば『行ったことない』なのよ」

「そりゃ今じゃ、そうであろうまでで、何も慧海が『ここです』と言ってくれるわけじゃないんだよ。わざと書いてないくらいなんだから。でも、俺が聞きまわって、そこへ行って、これだと言ってることを、何でそんな現地を見てもこない人が、『嘘だ』なんて決め付けられるんよ」

おそらくは、机上学者のあたりが難癖をつけてのことだったのであろう。その人なりの「自己実現」の領域が、軽い奴らに侵されて、マスコミまで急に「慧海は…」と訳知り顔にはしゃぎたてる…我慢ならず電話に手が伸びたのであろう。

名声は、そねみ、ねたみ、誹謗も巻きおこす。それらが、人間の劣情であると糾弾すべきか

といえば、我知らず、相手の自己実現、経済領域を危うくした結果であることも多い。

ちなみに、根深氏の精力的な取材、裏側へも果敢に潜り込んでいく取材は、ネパールの多くの腐敗をも目にすることになった。先の王宮の惨事も、「意外」の範疇に入ることではなかったらしい。

彼は言われたそうだ。「人の国の汚い所を描いて、あなたはそれで楽しいのか？」。食べていくため、仕方がないならともかく、その国の既成のイメージで食べていかねばならない人が大勢いる。ましてネパールは、観光立国をしていかねばならないのである。彼の愛する国を苦境に落とす訳にはいかない。だから彼も書いてはいないそうである。

また、次なるテーマ「雪男伝説」も、もう彼は突き止めてしまった。何のことはない、既に1937年には実態を報告されていたし、現地の人は「この冬も、たくさん出たよ」と、相応にあっけらかんとしたものである。しかし、「雪男伝説」も観光資源なのである。汚いゴンパに安置された、「雪男の頭の皮」。それをもっともらしく外国観光客に見せることで、潤う僧院、食べていける老婆達がいるのである。

もう書くだけにまでなった「雪男伝説」。どんな切り口なら、かの国のロマンであり続け、かつルポライター根深誠の夢を追った一作とできるのか？二兎を追う思案に暮れる氏である。

そのように、「ルポライター」が遮二無二に「事実でさえあれば」の突進では済まないことにも気付き、「ルポライターの正義」に迷いも交じってしまう氏のようである。ただ、氏の迷いは、相手を思い、伏せた方が…の迷いであって、売名が主意で、事実を曲げてもまでの「迷い」ではない。

そんな氏を怒らせる「やらせ」が、名声を利用する形で、また、誰がみても張本人としかいいようのない「白神山地」報道でも繰り広げられることになった。

氏を代表するもう一つのジャンル「白神山地」の運動については、ここではあまり触れない。ただ、ヒマラヤに比べれば　豊かすぎる自然に恵まれ、豊かすぎる社会に生き、言葉も十分に通じうるはずの日本社会。それなのに、かえって心貧しく事実の歪曲化がされ、視聴率さえ上がればが正義となり、４０何分の中でまとまればよしの切り口がなされて、それが問答無用に視聴者に「事実」で刷り込まれる。報道の正義はどこにある？訂正はどこまで責任をもってなされるのか？

ヒマラヤと、白神山地をめぐる活動…世界遺産である以外はあまり脈絡なさそうでいて、彼の行動においては十分の必然性がある。圧倒的な自然の中で、生き抜くために生き、そんな厳しさを知るゆえに、外国人であっても心開き、言葉の壁を越えて語ろうとしてくれる人々…。無人地帯で出くわし、お互いを盗賊団か、警察かと警戒したあげく一夜を共に過ごし、別れいくまさに一期一会の異境の人々。

「これまでに４人殺しました。何回盗みをしました。これからも人を殺しますから、どうぞこんな私でもお助け下さい」と祈るような、生きることにあまりに正直な辺境の人々に、彼の心は渇望し、日本をあとにしてしまうのだ。

さて、私はいとも簡単に「明治大山岳部出身」「植村直己氏との関わり」を冒頭にあげている。

しかし、講演会で、彼は「山岳部」としか言わず、植村氏については触れなかった。二次会で、下調べ済みの主宰者による「明治大山岳部なら、植村さんとも接触があったのでは？」の質問で、少し。総勢４人になった三次会においてようやく、「植村さんはね…」と自ら語りだしたのである。三次会まで付き合えば、やはりとっておきの話が聞けるもんだと、南中の満月にも笑みを送った私だった。

ところが、このルポをまとめるにあたり、講演中はメモ。あとは記憶のみであった私が、いくらなんでも照合してと、手にした著書２冊においても、そうだったのである。略歴の次には本文を確認してみた。「明治大」も「植村直己」もでてはこない。「あれ？」が「れ、れ？」「どうして？」…。普通なら、略歴に「明治大山岳部」があっても、「後輩として植村直己氏捜索に関わる」とあってもなんらおかしくはない。むしろ出版界で食べていくために、そんな話題の種があった方が有利であった頃もあったはずだ。講演だって、超有名人の裏話に聴衆を沸かせられたはずだ。ちなみに、植村直己著書には、略歴にも本文中にも「明治大山岳部」となっていて、書かないのが常識な訳ではない。

「なぜ？」にわかルポライターは、閃いた。根深誠は「故意に」伏せているのだ！それは、彼にとって「重すぎる植村直己」が存在し続けていることに気づかされた瞬間であった。

前述の報道トラブルにおいても、白神山地がどんな存在であるか、どんな開発の歴史があり運動の歴史があったのか…そのような下調べもなしの男が、所用時間内にロケを終え、４０数

分にストーリーがつながることだけを目的に、浅いインタビューをやり、曲げて流布させてしまう。

おそらく彼は、「根深誠＝明治大山岳部＝植村直己」の安易な等式だけで「植村直己さんてどんな人でした？」の質問が発せられることが堪え難いのである。一言で言えるくらいなら苦労しない。彼をさておき、植村直己が話題になる不快・無礼ばかりではない。彼にはおいそれと言葉にはできない、口にすれば、沈殿した澱がまたも舞い上がるような男。それが「植村直己」なのである。

少なくとも、「年間７合宿があり」や、その後の「ヒマラヤ遠征」の記述で、自分が明治大山岳部出身であることぐらいは予想でき、植村直己がやっていたことも知っており、その年代なら接触点があったはず…相手がそれぐらいの素地をもっていてくれなければ「植村直己はね…」を語り始めることができない。わざわざ「明治大山岳部なら…」と攪乱の種を提供するまでもない。そうと考えなければ、あまりに不自然すぎる伏せ方なのである。

かつて根深氏は、まさに「植村直己遭難」直後の現場に立った。彼ら以外に、あの植村直己が、「どんな時期に」「どんな場所を」「一人で」登って行ったのかを検証した者はいない。それは、とかく彼の禪姿の方を目にし、おそらくは下級生ゆえの嫉み、羨望にまみれ、次々の冒険を売名行為のうちと見ることもあったであろう根深氏に、あまりに壮絶な現場であった。

ルポライターとして、現場主義に生きる彼には、あの検証を語ってこそ、「ルポライター、根深誠」が完結する。

しかし、彼はまだ書きえない。自身が、名声を手にし、かつ、ねたみ、嫉み、誹謗を受け、我欲に事実を曲げて平気な人々に翻弄されるにつれ、以前より、植村直己を理解してきたのだ。名声の陰で、どれほどの世間の烈風が彼の回りに吹いていたか、利用されたか。しかし、あの男はそれらをも、帆に受けて次の冒険に漕ぎ出ようとする男だった。

冒険の借金を返すために、次の冒険のスポンサーをつかむために。ほとんどが単独行であった彼が、書けば、語れば、それ以上の真実を誰も語れるわけではない。では、彼はそれで全てを語りつくしたといえるのだろうか。

無事帰国した後の彼は、それこそ商品の価値の下がらぬうちにと、言われるままに各地の講演に飛び歩いていた。空旅で一日２会場をこなしてもいた。憔悴を漂わせながらも遠い視線の彼が、空港で見られたという。

ちなみに慧海は、命を賭した辺境の旅と言われるけれど、根深誠の調べた限りでは、あの多民族国家にあって日本人であることは黙認され、僧侶としての喜捨も受け、異境の旅を楽しんでいたらしい形跡があるという。

すなわち根深誠において、彼が年を経るほど植村直己という男のジグゾーパズルは埋められつつあり、彼がピースを手に思案している間は安易な詮索を逃れていたいのだ。

「明治大学山岳部」と晴れて明記し、植村直己遭難現場の壮絶から語れる男…根深氏ならではの著作を待ちたい。

「ルポライターをルポ」おばさんと。